

会議要録

会 議 名	第3回進路支援講座業務委託事業候補者選考委員会
開 催 日 時	令和6年3月27日（水曜日） 午前9時から午前11時15分まで
開 催 場 所	港区立教育センター 研修室1
委 員	【出席者】 三尾忠男、増渕達夫、秋田博昭、吉野達雄、篠崎玲子
事 務 局	下橋良平（統括指導主事）、加藤靖規（指導主事） 澤木俊宏、堀内遥、宮原可帆（教育支援係）
会 議 次 第	1 開会 2 二次審査実施概要について 3 プレゼンテーション及びヒアリングの実施について 4 二次審査結果及び事業候補者の選定について 5 閉会
配 付 資 料	【配付資料】 資料1 二次審査実施概要 資料2 二次審査採点基準表（3事業者分） 資料3 一次審査・二次審査集計結果（※採点終了後に配付） 資料4 第2回進路支援講座業務委託事業候補者選考委員会会議要録（案） 参考資料1 一次審査集計結果 参考資料2 進路支援講座業務委託事業候補者選考基準 参考資料3 仕様書

会議の結果及び主要な発言

事務局	<p>1 開会</p> <p>2 二次審査実施概要について (資料1・2の説明)</p>
A事業者	<p>3 プレゼンテーション及びヒアリングの実施について 【A事業者】 <プレゼンテーション> (企画提案書の説明)</p>
E委員	<p><ヒアリング> 教室内での講師の配置について、講師が1名と補助講師が2名の計3名体制ということと巡回指導員の配置の話があったが、具体的にどのような体制を組んで誰がどのような指導をするのかを教えてほしい。</p>
A事業者	<p>メインの講師は基本的に主導する講師だと考えている。補助講師は各生徒のサポートに入るのが基本である。一方で、英語を例に挙げると講師が英語で会話をする中で1人が司会をやって2人は演者をするという演劇のようなものを見せながらやるということも想定している。科目や単元によって運用方法を変えていこうと考えているが、基本は、講師がその日の取組の方針提示を行い、補助講師がその補助にあたるという想定をしている。</p>
B委員	<p>本事業への考え方に関して、学校の指導とA事業者の指導ですみ分けが必要だと考えていると思うが、本事業での役割分担について基本的な認識を教えてほしい。</p>
A事業者	<p>進路指導に関しては学校の考えがあると思うため、具体的な高校名を出してここに行こうという指導は避けたいと思っている。一方で、例えば日比谷高校に合格をさせるためにはそこに至るところまでのサクセスストーリーやプロセスがあると思う。勉強法やどのくらいの質や量の学習を頑張っていかなければならないのかというような助言は出来ると思う。加えて、学校独自の問題や入試の仕組みのアドバイスも出来る。</p>
B委員	<p>時には学校の指導に対して子どもたちが不安に思うこともあると思う。そういった時にはどう対応するのか。</p>
A事業者	<p>本事業は進路支援ということで入試に直結するものだと思うが、基本的には公立高校の入試問題は教科書の範疇で構成されると把握している。民間の参考書や学習コンテンツは素晴らしいものを持ち合わせていると思うが、公教育で使用するものを繰り返しながら進めていこうと考えている。</p>
D委員	<p>企画提案書の中で「集団指導の経験を5年以上有しており」と書いてあるが、経験というのはどのような経験なのか具体的に教えてほしい。加えて、「都立高校入試に明るく」と記載があるがこちらもどのような意味なのか</p>

	具体的に教えてほしい。
A事業者	経験については、弊社は学習塾を運営しているため、弊社もしくは他社で集団指導の経験がある若しくは本事業に親和性があるような集団指導の経験がある者を配置しようと考えている。都立入試に明るくというところでは、抱えている講師の中でも、都立高校入試の指導の経験がある者を優先的に配置しようと考えている。
C委員	講師の採用方法について、登録者数が10万人という実績は素晴らしいと思うが、登録人数が多いとその分犯罪者等が紛れ込む可能性もある。そういった面に関しての対策はどのように考えているか。また、家庭学習が大切だということはそのとおりだと思うが、どのように家庭学習を充実させるのか。
A事業者	サービス事故や性犯罪に関しては採用の部分でリスクを抑えることが大切だと思うため、適性検査をしっかりと行う。採用後については、各自治体で起こったサービス事故をピックアップしながら研修を行う。また、事故には至らなかったが、保護者や学校から叱られたこともあるので、そのようなことがないように話をしていく。学習指導での身体接触は基本的にはないと考えているが、身の危険を回避する事由では身体接触が起こることはあり得ると線引きしており、気を付けようということを伝えている。家庭学習を充実させるための指導を、授業中に取り入れていこうと思っている。どのようにノートをとるのかというノート指導や教科書に準拠した指導を行う。例えば、理科や社会に関しては教科書の何ページに書いてあってどのレベルまで深掘りして学習するのかということを伝えながら家庭学習を充実できるようにする。
A委員	基本方針で記載がある三本の矢について、矛盾する場合も発生しうらと思う。そのような状況が起こっているかもしれないということをどのように把握するのか。また、矛盾が発生した場合に学校を優先してもらおうということだが、生徒本人へはどのように対応するのか。ICT教材の活用について、システムを利用して管理者が月ごとに学習の記録を把握するという記載があるが、管理者は何名いて、何名が何名の生徒の学習の記録をチェックするのか。質の担保や月ごとのチェックで頻度が足りるのかということについて考えを聞かせてほしい。
A事業者	まず、質の担保については巡回員を入れていこうと考えている。巡回員は、類似事業で責任者の経験がある者や退職校長を採用している。我々の方針を理解しながら巡回できると捉えている。当然、我々も定期的に巡回を行うため、その中で三本の矢がしっかり守られているかを確認していく。加えて、子どもの気持ちに寄り添った指導については、会場責任者が子供たちに声掛けをして様子や状況を把握していこうと考えている。ICT教材の管理システムについては、参加者数によって管理者数を考えなければいけないと思っている。1人の管理者で面倒を見ることができる参加者数は20名程度であると考えため、100人の参加者がいた場合は5名程度の管理者をあてがおうと考えている。指導ごとに把握をするのは当然だと思っているが、大掛かりなアドバイスや時間を長めにとった指導やフィードバックは月次程度で考えている。また、ICT教材ならではの良さもあるため、対面を受講している生徒の中でも希望する生徒には紙テキストだ

	けでなく、ICT教材にも触れられるようにしようと考えている。
B事業者	<p>【B事業者】 <プレゼンテーション> (企画提案書の説明)</p>
E委員	<p><ヒアリング> 対面講座の指導方法について、メイン講師1名、補助講師4名とあるが、具体的にどのように指導していくか教えてほしい。</p>
B事業者	<p>通常の学校で行っているようにメインの講師が前に付いて授業を行う。補助については4名の講師が適宜机間巡視をして、授業についていけない生徒への振り返りの学習等を二人三脚で行う想定でいる。</p>
B委員	<p>本事業への考え方について、自己決定フェーズと学習フェーズというものがとても特徴的だと思うが、学校も自己決定ができるような取組を行っている。そういった意味では学校の指導と重複するようなところもあると思うが、学校の指導とB事業者による指導についてどのようにすみ分けを考えているか。</p>
B事業者	<p>学校で行っている取組とかなり重複するようなことがあるとは認識している。本事業でのすみ分けにおける最大の特徴は連携パートナーの大学生が中学生に寄り添って二人三脚で考えることができる点だと考えている。配置する大学生は基本的に東京都出身者や都立高校出身者を配置する予定である。学校では触れ合う機会の少ない直近で高校受験を経験した大学生からアドバイスや情報をもらうことで、さらに高校のイメージが湧き、自分がこのような勉強をしていきたいということやどのような高校生や大学生、大人になっていきたいかというイメージを具体的に持つことができるような斜め上の関係性が作れればと考えている。</p>
B委員	<p>そうした時に学校の指導と食い違ってくる場所も出てくると思う。子どもたちが学校の指導をあまり良く思わなかった時にどのような対応をするか教えてほしい。</p>
B事業者	<p>他の案件でも何度か起きたことがあるが、こちらからは何かをしなさいということやこうした方が良いといった断定的な発言は避けて、最後に必ずあくまで一意見であるため、学校の意見も当然尊重してほしいし、こちらの講座でも素直に感じたことは伝えてほしいと言うようにしている。あくまで学校を否定するわけでもないし、こちらが正しいというわけではなく、最後に自分自身で決定することが重要であると伝える。このようなコミュニケーション方法で学校や講座を信用できないという生徒は現時点では出ていない。</p>
C委員	<p>昨今の報道の中で、性犯罪に関しては保護者の関心が高い。そういった点をどのように考えているか。また、特別授業の実施で勉強以外の点もあったが、平日2時間行ってそれ以外に1時間をプラスして設定するということか。</p>
B事業者	<p>特別授業については、1・2年生について区が設定している枠の中で実施</p>

	<p>する。3年生については自習の時間が設けられているため、その時間の中で特別授業の実施を予定している。性犯罪の対策については、現場に社員を配置し、講師と子どもたちのコミュニケーションをしっかりと確認するとともに研修の中でも対策を盛り込む。定期的に現場に配置しているメンバーからヒアリングを行うとともに期初・中間・期末で子どもたちに匿名のアンケートを実施する。これは他自治体でも実施している。また、女性社員も現地に入り、多角的に見ながら子どもたちに不快な思いをさせない現場運営をするということを考えている。</p>
A委員	<p>自己決定能力を育てる進路支援モデルの実現という文言があるが、これと本事業の関連性がよく理解できないため、説明してほしい。自己決定フェーズが非常に重要であると考えているが、自己決定フェーズから学習フェーズに移る判断の裁量や根拠、バラつきに対してどのような体制で臨むのか。</p>
B事業者	<p>本事業の目的は希望進路の実現と考えている。希望進路の実現を行うためには学力の向上ということにフォーカスするべきである。しかし、他自治体の案件を見ていると、勉強をたくさん頑張って第一志望校に進学したが、中学の時に勉強をやらされていたのが原因で、高校生活に前向きに取り組めていないという生徒が多く見受けられた。目的を達成するという事だけを考えると学力の向上で終わりで良いと思うが、生徒の一人ひとりの将来を考えた時には学力の向上にとどまらず、その前段階である自分自身の勉強に対する動機付けや意味付けをしっかりとしてほしいという意味で自己決定フェーズを決定している。また、フェーズの移行については補足資料に記載があるシステムの分析で読み取ろうと考えている。学力だけでなく、学習時間の変化や非認知能力の分析を行う。学習に対する向き合い方についてもアンケートを収集するため、やらされている状態から自然に取り組めている状態に移っているか等どこまで自己決定フェーズが進んでいるかを分析したいと考えている。</p>
A委員	<p>学習フェーズへの移行については、生徒によってバラつきがあると思う。最悪の場合、年度が替わるまで移れない生徒もいると思うが、どのような対応をするのか。</p>
B事業者	<p>自己決定フェーズと学習フェーズについては並行して行うことも出てくると思う。自己決定フェーズが完了したから学習フェーズに移ろうとするとなかなかやりたいことが見つからず、学習に移れないということも出てくると思う。学習を行いつつ自己決定フェーズを進めることで生徒がより主体的に取り組め、最終的な希望進路の実現につながると考えているため、自己決定フェーズが終わりきらずに1年間を終了してしまう生徒も出てくると思うが、基本的には並行して進めるつもりであるため、自己決定フェーズが終わらなかった場合でも学習フェーズについては完了させたいと考えている。</p>
A委員	<p>大学生の講師の確保については問題ないのか。</p>
B事業者	<p>採用計画によるので何名までをどの大学でというのは明示できかねるが、事業を行える体制にはする。</p>
A委員	<p>1つのクラスで同一の講師が年間を通じて行うのか、頻繁に変わるのか。</p>

	また、その効果をどのように考えているか。
B 事業者	基本的には同一の講師で行うことを考えている。他案件においても、同一の講師が1年間を通じて指導を行っている。基本的には同一の講師が担当することによってクラスの進捗状況の管理や生徒の習熟度への理解が深まる。さらに、補助講師とのコミュニケーションも円滑に行えると思うため、日数が経つごとに学習効果が高まると考えている。
C 事業者	【C事業者】 <プレゼンテーション> (企画提案書の説明)
E 委員	<ヒアリング> 講師の配置について、メイン講師と補助講師を1名ずつ配置するということが、どのような体制をとるのか。また、採用について適正検査で暴力的傾向と幼児性愛傾向の有無の確認と記載があるが、他にプラス面での採用の判断基準があれば教えてほしい。
C 事業者	メイン講師に関しては基本的には全体の統括を含めて講義の進行の役割を担う。補助講師に関してはメイン講師のサポートという名目であるが、基本的には生徒一人ひとりの様子を伺う。集団指導では生徒が着いていけなくなるケースがある。そういったケースを懸念して基本的には遅れている生徒がいないかを確認しながらサポートを行う。また、宿題のチェックや小テストの採点等も行う。事業内容だけではなく、日々の積み重ねの部分から宿題が出来ていない生徒や小テストで点数を取れていない生徒には授業後に声掛けを行うなどメイン講師とコミュニケーションをとりながら実施する。適性検査については、チームワークや全体の統率力など講師としての適性を確認する。弊社のグループ会社である学習塾で蓄積したデータを利用して、より質の高い講師を配置する。
B 委員	学校での学習指導や進路指導とC事業者が実施する指導にすみ分けが必要だと思うが、基本的な考え方を教えてほしい。
C 事業者	学校が行う進路指導に反してはいけないと思う。すみ分けは重々承知しており、学校の授業では盛り込めないような学習塾らしい特徴を出していければと考えている。
B 委員	学習塾らしさとの発言があったが、具体的にはどのようなことか。
C 事業者	国語の指導を例として挙げると、学校の教科書を扱うのではなく、入試で過去に出題されたものを読み、限られた時間の中で答えを導き出せるようなテクニックを指導する。
B 委員	学校の指導と食い違う可能性もあるかもしれないがその点はどうか。
C 事業者	研修段階で学校の教え方を理解するよう指導を行う。講師がこのやり方が絶対に良いというような押し付けは研修の段階でしないように注意の声掛けを行う。区の職員の一員のように取り組みたいと考えている。トラブルや悩みを聞く瞬間が出てくると思うが、我々が判断するのではなく、起

	きた事象については区に報告し、場合によっては学校の先生にも報告して一緒に課題を解決していきたいと考えている。
D委員	講師で5年以上の経験と記載しているが、ただ経験があれば良いとは思わない。やはり質の高い講師が必要だと思う。質の高い講師をどのように配置するのかを教えてほしい。
C事業者	採用方法のところで筆記試験を必須条件としている。また、本部担当職員とコミュニケーションをとったり、模擬授業の実施を行っている。
C委員	幼児性愛だけでなく、ハラスメントの防止に向けて研修をしっかりと行っているかを確認したい。
C事業者	ハラスメントの研修については事前研修の中で1時間ほど必ず行う。コンプライアンスの研修動画を20～30分程度流した後に業務に従事する上での誓約事項が20ページほどあるため、それを全て読み上げ、教育業界の事例と絡ませながら理解させている。
C委員	ICT教材の利用者については、電話ではなく、オンラインの質問アプリ等で進捗状況を確認できないのか。
C事業者	ICT教材の利用者の質問アプリの利用については、区と要相談になるが、前向きに検討したい。進捗状況については、カリキュラムをICT教材に登録すると遠隔の管理画面で見ることができるようになる。
A委員	ICT教材による学習の進捗確認において、「家庭連絡」という文言を使った意味は何か。また、定期的というのはどれだけのインターバルを考えているか。また、3年生の指導計画について10月までに学校教育の内容を全て終わらせ、11月以降は高校受験の勉強をするという認識であっているか。カリキュラムについては柔軟に対応と記載があるが、生徒一人ひとりに対しても対応できるのか。そのような対応は誰が行うのか。
C事業者	「家庭連絡」についてであるが、高校受験は一人で頑張るよりも保護者をはじめとした家庭の協力が重要であると考えている。子どもの頑張りを保護者に理解してもらいたいという意味を含めて使用している。連絡の頻度については、少なくとも学期に1回と考えている。状況や出来具合もあると思うため、生徒に合わせて1か月に1回にするか等は調整していきたい。また、11月からの入試の取組はご認識のとおりである。柔軟に対応するという点については、今回は集団指導であるため、カリキュラムの大きな流れを細分化することは難しい。数学は習熟度の差も大きいいため、場合によっては2回で扱う予定であったことを3回で扱ったり、それより多くなりそうな場合は後半に入試演習の期間を設けているが、理解を深められるように工夫していく。
事務局	4 二次審査結果及び事業候補者の選定について (資料3を配付して採点の集計結果を説明)
B委員	【二次審査の講評】 A事業者は様々なところで実績があり、安心して任せられると思う。しか

	<p>し、都立高校入試の特徴をどれだけ理解できているかが気になった。B事業者は理論的に積み重ねていることは分かったが、大学生の講師がそれを理解しながら講義を行えるのかは心配であったため、提案の実現性を少し低く採点した。C事業者はプレゼンテーションが分かりやすかった上、教育委員会との連携についても具体的に提案がされている。例えば3年生の11月あたりで入試対策を行う等の明確な指導計画や指導の仕組みもよく考えられており、質疑応答の際にも明確だった。</p>
C委員	<p>A事業者はオーソドックスだというイメージを持った。B事業者はプレゼンテーションを聞くことで企画提案書だけを見ていた時よりも良い印象を持った。教室に講師を4名配置できるのも良いと思ったが、都立高校から特定の大学に進んでいる講師となると同じタイプの人ばかりになり、講師に偏りが出ることが懸念される。C事業者は区の実態を理解しているという印象を受けた。区の実態に柔軟に対応しながら事業を展開できると思う。</p>
E委員	<p>配置については具体的なところを説明してほしいと思っていたが、その観点からするとC事業者が良かった。A事業者についてはオーソドックスに仕様書を履行してくれると思った。B事業者はビジネス感が強いと思ったが、これからの時代に求められるタイプはこのようなタイプかもしれないとも思った。都立高校だけではなく私立高校への対応も考えられており、実態を理解してくれているという意味ではC事業者が区にはあっていると思った。</p>
D委員	<p>C事業者は他の委員が言っているように安定しているという印象を受けた。B事業者のフェーズという考え方は悪くないと思うし、中身は評価できる部分もある。しかし、区の仕様書が求めている部分とは少しずれている印象を受けたため、高い得点は付けることが出来なかった。</p>
A委員	<p>A事業者は過不足なくという印象を受けたが、生徒への対応という面で少し手薄だと思う。B事業者は連携パートナーが学生を集め、一緒に活動しているようだが、連携パートナーとの責任体制がどこにも書いておらず、発言もなかったため、不安が残った。C事業者はこのような事業に慣れているという印象を受けた。都度、区と相談するという言葉を質疑応答の場面で返しており、安心できた。</p>
事務局	<p>【事業候補者の決定】 (再集計結果の説明)</p>
委員長	<p>二次審査の評価点数については、この点数で決定してよろしいか。</p> <p>(異議なし)</p>
委員長	<p>それでは、この点数のとおり決定する。この点数の結果をもって、当委員会として、最も得点の高いC事業者を事業候補者として決定してよろしいか。</p> <p>(異議なし)</p>

それでは、そのとおりに決定する。

→ C事業者を事業候補者とすることを決定

5 閉会